
今日からオレは悪の大幹部

秋保一字

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今日からオレは悪の大幹部

【Nコード】

N78070

【作者名】

秋保一字

【あらすじ】

オレが生まれて17年目の記念日に親に宣告されたのは……、我が家が代々悪の組織を経営していて、オレがその後継者！？ふざけるッ！！なにが大幹部『黒鎧貴子』イエビルリッター！！ボクが考えたカッコいい悪の大幹部の名前じゃねえんだよ！！イイ歳して中2病に患いやがって……。これを考えるのにもすごい時間がかかったんだぞなんて満足した面言っただけじゃねえぞ××××があ！！なに？しかもこれを機に引退するだとおおお！？息子に面倒事ぜええんぶ、押しつけてんじゃねええええ

え！！……この物語は若干17歳にして悪の大幹部となつた城崎
一生が、親に悪の組織を半ば強引に継がされ、戸惑い、傷つき、挫
折を味わいながらも、悪の組織を強大にしていくサクセス？ スト
ーリーである。

第1話「悪の啓示 一生よ、大幹部となれ」？

あの時は、あの日はいつもと変わらないように思えた。思ってしまった。

世間で俗に云う「誕生日」という響きにオレは一切ときめかなかった。当然だ。我が城崎家では誕生日なるものは、戸籍上一つ齡を重ねたことを確認するためだけの日にすぎず、祝福の言葉も無く、ましてやケーキやごちそうの類などは存在自体を消失していた。それが当たり前で、常識だった。

オレの両親は息子があの日17歳になったことなど知りもしないだろうと思っていた。別に息子に無関心というわけではない。むしろ息子の成長を一番喜んでいたのは両親だ。ただ、誕生日という概念が彼らの頭の中から消え去っていただけなのだ。かつてはその事に反感を覚えはしたが、今となってはどうでもよくなった。むしろ、誕生日ごときで騒ぐ世間こそが異常なのだとは今では思っている。

あの日の朝は夏の到来を喜ぶように蝉が騒がしかった。オレの不快指数も80を越え、これから炎天下の中わざわざ学校に行かねばならない高校生のこの身を嘆き、同時にクーラーのきいた家でワイドショー三昧の専業主婦たる母親への恨めしさがオレの足音をドタドタと乱暴にしていた。

「おはよう」

居間に着いたオレへの返答はパターン化され、「一生おはよ」もしくは「今日も早いわね」のどちらかに限定され、今回もそのどちらかが母親の口から出るはずだった。

「ああ、一生。17歳の誕生日おめでと」

ほんの一時、時が止まったように思えた。現に、冷蔵庫へ向かっていた足が歩みを止めた。

「あ、ああ、ありがとうゴザイマス……」

あ、ありえない。そんなバカな。過去16年間誕生日をことごとく無に帰してきた親だぞ？ そんな親が、自分の誕生日すらも忘れていた親が、誕生日を覚えていて、尚且つオレの年齢を把握しているのだと……！？ 目の前にいる母親は本当にオレの親なのだろうか？ 実はオレの本当の親は昨晚のうちに異星人にアブダクションされ、今オレが見ている親は異星人があてがった偽者ではないのだろうか。その時のオレは親不孝ながら本気でそう思ってしまった。そちらのほうが信憑性があったのだ。

「一生、話があるからこつちに座んなさい」

自分でも驚くほどすんなりと母親の言う事を聞いて、母親の対面に正座した。まるで今から怒られるかのように母親とオレを取り巻く空気が肌をピリピリと刺激するように重苦しかった。恐る恐る母親の様子を窺うと、今まで見たことがないほど、母親の表情が真剣だった。「マジ」ではなく、「しんけん」の方だ。母親が気に入りの昼ドラを見ている時でさえ、ここまで鬼気迫った表情はしないだろう。

母親の言う通りに座ったものの、さっき言葉を発して以来母親は口を真一文字にしたまま開かなかった。開こうとすらない。ただひたすらオレの方を凝視してくる。いつまでオレはこの空気の中に

居続ければ良いのだろうか。これは軽い拷問だ。あんまり圧力をかけられるとオレのお腹がキリキリ痛んでくるので、用件があるなら早く言ってほしい。誕生日を祝いたいのならオレのためにこの場から解放してほしい。その凄まじい視線をオレではなく、お気に入り俳優が映っているテレビに向けてやってくれ。

「……話というのはね、一生。城崎家の家業のことにすることなの」

そこでまた黙ってしまった母親。出来ることなら母親にはさつさと言ってほしい。さつさとこの空気を変えてくれないとオレがどうにかなくてしまう。体感重力が倍になったのではないかと思うくらい重苦しいわけで。正直、家業なんてどうだっていい。いったい何の職種かは知らないが継ぐ気は一切ないし、借金さえなければそれでいい。そんなことよりこの重圧から早く解放してほしい。

そう軽く考えていたのだが、その時のオレがすべきことは母親の話を聞き続けることではなく、母親に拳をお見舞いしてやり、速やかに我が家からエスケープすることだった。今なら選択を間違えない。オレは無駄なく迅速にそれを行ってみせる。

「実は……」

「実は？」

今さらだが、この時からイヤな予感はしていた。なにか人生の選択肢を間違えてしまい、しかも後戻りできないほど致命的に間違えてしまったような悪寒がした。今思えばこれはアラートだったのだろう。そのアラートを有効活用していれば、オレはホームレス高校生になっっていたものの、真っ当な人生を送っていたはずだ。そうで

なければ報われんではないか……。

母親が意を決したように口を開く。どんな家業にせよ、どんな問題があるうと向き合うつもりだった。それが間違いだったことは言うまでもない。

「実は一生、あんたに城崎の家業の悪の組織を継いでほしいの」

アンタニキノサキノカギヨウノアクノソシキヲツイデホシイノ。

ドワイウコトデシヨウカ？ イマイチニツポンゴガリカイデキナインデスガ？ オー！ コレガジャパニーズジョークデスネ！ H A H A H A！ ジツニファニーデスネ。ハラキリフジヤマテンブラ！

……思わず現実逃避してしまったが、冷静になってみるとこんな話ありえない。悪の組織？ そんなもの子供向け番組の中の実在。つまり絵空事じゃないか。まったく母親も人が悪い。数か月遅れのエイプリルフルをよりによって息子の誕生日にするのだから。どうせどこかにドッキリ大成功というプラカードが隠されているんだろう？ いやはや、いきなり誕生日おめでととか言うから驚いた。わざわざこの日のために戸籍抄本まで調べて息子の誕生日を確認するのは恐れ入った。そこまで念入りにしたのはいいが最後の最後に詰めが甘かったな母上殿。まあ、ちよつと早めの親孝行に、最後まで騙されてあげましょうか。

「悪の組織？ おう、オレが大幹部にでもなんでもなつてやんよ！」

今までを振り返ってみて、その言葉がなければオレは今のようにはならなかっただろう。もし、過去に戻る怪人がいたならば、この時に戻ってオレの口を封じてやりたい。というつかやる。かくし

てここからオレの苦難が始まった、いや、始まってしまったのだ。

第1話「悪の啓示 一生よ、大幹部となれ」？ 終

次回 第1話「悪の啓示 一生よ、大幹部となれ」？につづく

第1話「悪の啓示 一生よ、大幹部となれ」？

ちよつと遅めのエイプリルフルのはずだった。

母親がおそらく多くの時間と労力をかけて実施したドッキリに、オレはまんまとひっかかてやり、最終的にドッキリでしたというプラカードを見せられて終わりのはずだった。

オレはドッキリだったことに悔しがる素振りを見せながら、母親に軽口をたたくのだ。よくあんな稚拙なネタでオレを騙そうとしたな、と。母親は、あんたその稚拙なネタにひっかかってたじゃない、と言い返すのだ。そしてお互い笑いあい、オレは学校へ行く準備をし、母親は朝食の準備に取り掛かりながら、改めて誕生日おめでとう、とオレを祝福してくれるのだ。思いもよらない言葉に照れながらも、オレはありがとう、と聞こえないようにつぶやくのだ。

——オレはなんでもない誕生日が人生最良の日になったこの出来事を一生涯忘れない。反吐が出るようなその一文でこの物語は締めくくられるはずだった。はずだったのだ。

だがオレは失念していたのだ。母親がこういう冗談を最も嫌うということを。

オレの上の妄想通りに事が運べば万々歳だったのだが、現実はその上手くはいかないものだ。「今日からオレは悪の大幹部」はまだまだ続く。というかプロローグの最序盤でしかない。でなければ……

「我らの新指導者“黒鎧貴子”イエビルリッター様万歳！！」

「『『『万歳！』『』『』」

薄暗い洞窟——彼ら曰くアジト——の中で、明らかに戦闘員やつてらっしゃる黒タイツの方々に囲まれ、敬意を込めた目で見られ、万歳などされないだろう。ていうか、大の大人が悪の組織の戦闘員ごっこ？ 働けよ。社会に貢献しろよ。パブリックエネミーでもまだお前らより世間のためになってるから。ニートでもまだ自宅を守ってる分社会に貢献してるから。アナーキーでもまだ人のためになってるから。まあ、何が言いたいのかというとお前らさっさと職安行つてこいということだ。

「我が忠実なしもべたちよ。今日我がザンキリ師団に新たな大幹部が誕生した。我が息子イエビルリッターが我が組織に未曾有の繁栄をもたらし、創立以来の悲願を達成してくれるであろう！」

洞窟に不釣り合いな豪奢と冒流的と退廃的という表現をごちゃ混ぜにしたような印象の玉座に坐し、朗々と歌うように戦闘員達に宣言する母親改め“妖冥女皇”デモニクイーナ。なんなのそのセリフ。なんなのその女王様ファッション。頭には申し訳程度の黒い王冠、髪は悪魔の角を模したようにツインロール、顔を仮面舞踏会みたいなドがつくほど派手な仮面で隠し、トップスは革とレースを多用したコルセット、ボトムスはデニープにカットされたスカートでガーターベルトがお目見えしちゃってますね。極め付けに靴は漆黒のハイヒールパンプス。あつ、なんの毛皮を使ったのかわからないファークートの肩の部分についた獣の顔がオレを睨みつけてきやがりますね。どういう構造なの。そんな格好を臆面もなくなさるとはさすがはデモニクイーナ様、感性が理解できない。歳を考えると。いくら若く見られるからといって30後半のババアがその格好は戦慄するわ。オレの精神を責める拷問なのか。確かにそれは効果的だな。現にオレは今この場で吐きたい気分だ。穴があつたら間違いなく投身

するわ。

ていうかお前らもお前らだよ戦闘員！ なにウチの母親を憧れと欲望を秘めた眼で見てんの！？ ウチの母親をそんな目でみるなよ気持ち悪い。ババアだぞ、下手したらお前らより年上だぞ。ご近所さんから美人なお母さんで羨ましいわねえ、なんて言われてもババアはババアだつつうの。若づくりしてるだけなんだよ。もういやだ、なんなのこの悪の組織……、オレここの後継者なの？ 周りに頭が残念な母親とクズ野郎共しかいねえじゃねえか。継ぐ宣言をして1時間もお経たないうちにオレは大幹部職を辞したくなってきていた……。

エイプリルフルだと勘違いしたオレが大幹部になると言った途端これだよ。いきなり居間が謎の技術で降下するわ、降下した先が洞窟だわ、いつの間にか母親は女王様スタイルに着替えてるわ、今のお母さんは“妖冥女皇”デモニクイーナよ なんてぬかすわ、30後半のババアが語尾に をつけるわ、どこから出てきたのか黒タイツの戦闘員共がいつの間にもやら周りを取り囲むわ、誰かオレに説明をしてくれ。一応オレ当事者だぞ？ そのオレが一切事情を把握していないっておかしいだろ。

わからないことづくしではあるが、まあでもわかったこともあるよ。母親の言った我が家の家業は本当に存在し、オレはこのままだと本当に悪の組織を継ぐことになるってことだ。

確かに継ぐと言ってしまったさ。だが冗談じゃない！ オレにはオレの人生があるんだ。

それは変人共の巣窟たるこの悪の組織を継ぐことじゃない。

将来はまだ定まっていなくて、少なくともこの悪の組織を継ぐなんて人生だけは選択しない。絶対にだ！ 母親じゃない、オレがオレの人生を選択する。

母親には悪いが逃げさせてもらう。だがそれには問題がある。

逃げようにも地上へ脱出する手段の居間エレベーターへは戦闘員共が邪魔で気づかれることなく向かえそうにない。他の脱出路もわからない。なんかすでに手詰まった感じだな。

まあ、脱出方法は居間エレベーターしかなくなったと思えばいい。他のもあるかもしれないが、確実なのはそれだけだろう。戦闘員共は隠れていてよくわからないが、出入口らしき穴は数ヶ所あるがどこにつながっているかわからないし、地上につながっているとも限らない。この洞窟の構造がわからないオレにはそのルートを使うのは無謀すぎる。それだったら確実な方を選ぶね。

脱出経路は決まったとして、あとはいかに周りの戦闘員に気づかずに居間エレベーターまで到達するかだが、今のままだと絶対に不可能だ。オレは母親の横にいて、母親とオレの周りを戦闘員共が取り囲んでる状況なのだが、戦闘員共の死角が一切ねえ。どのルートを通っても戦闘員共の視界から逃れることが出来ない。せめて気を逸らすことが出来ればいいのだが。

どう気を逸らすというんだ？ 当然ながらオレの方に気を逸らしても意味がないし、オレの手持ちに戦闘員共の注意をひくような道具も無い。ほんのちよつとの時間でいいんだ。注意をひく事が出来れば、オレから50メートルちょいに位置する居間エレベーターに到達する自信がある。戦闘員共の隙だらけの包囲網を突破し、追手を振り切ることでできる身体能力と自信がオレにはある。だがそれ

も注意をひくことを前提としている。

気づかれずに逃げるのを諦めるなら少々強引な手段をとらなくちゃならんが、お互い無事ではすまないし、少なくとも見積もっても戦闘員は20〜30はいる。まず無理だ。

母親を人質にとって逃げるという方法もあるが、これだけはしたくない。頭が残念だが母親は母親。これをしたらオレは本当の外道になり果てちまう。これを選ぶぐらいだったらまだ大幹部就任のほうがマシだ。

結局手詰まりかよ！ 誰でも何でもいい！ 注意をそらしてくればオレは逃げられるんだ。100%ではないが確率は低くないはず。頼む！ このときだけはオレにチャンスをくれ！！

オレは本気で祈ったつもりはなかった。だがその祈りは幸か不幸か叶えられてしまった。いや、不幸だろうな。最悪の形で叶えられた。悪魔がその祈りを素直に聞き届けたか、神がその祈りを捻じ曲げて聞き入れたか、どっちにしろオレには最悪だった。

「デモノクイーナ及びその郎党共！！ 貴様らの命運もここまでだ！！！」

よりによってオレの大幹部就任日にクーデターが発生してしまったのだ。

第1話「悪の啓示 一生よ、大幹部となれ」？ 終

第1話「悪の啓示 一生よ、大幹部となれ」？ へつづく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7807o/>

今日からオレは悪の大幹部

2010年11月11日23時13分発行